

巻頭言 「完全無欠の助け手」

宇野 元

ヘンリー・ムーアというイギリスの彫刻家がありました。大阪にある国立国際美術館のエントランスホールで、すばらしい作品に会えますね。箱根には、気持ちのいい野外美術館があり、木々の間にムーアの作品がいくつか配置されています。書きはじめたら、頭の中の蜘蛛の巣がほぐれて、昔、とある大学の庭で巡り合った、大きな女性像を思い出しました。青空のもと、その横に腰掛け、友人に写真を撮ってもらいました。貴重な一枚は今どこにあることやら。

長女が小学校に上がる頃、この彫刻家の美術展と一緒にいったことがあります。かつて池袋に存在し、現代美術を積極的に紹介した「セゾン美術館」の企画展で、ムーアの仕事場を再現するという、興味深いものでした。ここからは蜘蛛の巣の記憶になりますが、廊下（を模した通路）の突き当たりだったと思います、正面の壁に、十字架が掛けられていました。文字どおりの荒削りの十字架、無造作に木を組んだだけの大きな十字架が。意外な出会いに驚きましたが、これを忘れないでいるのは、長女の反応が新鮮だったからです。体ごと、注目しているのがわかりました。芸術作品がもつ力によってではなく、なまの力のようなものによって。

イエス・キリストの苦難の意味を思いめぐらす季節です。芥川龍之介が「見苦しい」と表現した、荒削りの十字架における苦しみ。自分から好んで見たいとは思わない、見ないですませたい、見れば、きっと顔をそむけるだろう…… たしかに、イエスの十字架はそのようなものに思われます。けれども、もしその場に立ち会ったとしたら、私たちが体ごと、たたずませる力をもつものでしょう。十字架は、私たちが本当に無力で、助けが必要な者であることを教えてくれます。そして、イエスが十字架を自らのものにしてくれたことで、無力な私たちに助けが与えられていることを示してくれます。

イエス・キリストが、私たち人間の拠り所であることが、その捨て身の恵みにおいて、力強く証しされています。神の御子が、私たち人間と同じように生まれ、同じように苦難を経験した。いや、私たちより深く経験した。この事によって、私たちは手厚く守られています。イエスは完全無欠の助け手である、誰もが、また、どんな状況においても、この方を頼りにできる、そうカール・バルトは書きました。「助け主がすでに到着し、最前線に立ち、神の御前で私たちのために働いていらっしゃる。」